
メロンパンの太陽がのぼるとき

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メロンパンの太陽がのぼるとき

【Nコード】

N5931Y

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

自ブログからの転載です。ほんの少し手直ししています。

放浪癖のある草野風砂が出会ったのは、ぷちヤンキーなパン屋さん。彼のお兄さんが、新しい学校の担任の先生らしく……。

新しい土地にきて、まずすることといえば「散歩」だった。歩きでもいい。風が気持ちよければ自転車だっていい。なんの情報ももたず、ぶらりと出かけて標識や看板に誘われて、人の多いところも静まり返ったところも区別せず訪れるのは、すっごく贅沢な時間の過ごし方だと思う。お気に入りの、かつてはオフホワイトだったショルダーバックは、たくさんの景色の残り香をその身に染み込ませていく。

働くでもなく、学校に行くでもなく、気ままな生活だからこそできる所業なのだった。

まあ、褒められたもんじゃないんだけど。

だって私、中学生なんだから。

☆

「ありがとうございますー」

カラリン、カラン。ドアベルを背中であきながら、さあ今日もがんばるぞってふうに輝きだした太陽に目を細め、私は軽く伸びをした。耳元でカサリと鳴る白のビニール袋に、思わず笑みがこぼれる。朝イチからメロンパンを置いてるなんて素敵。えもいわれぬ甘い香り。あたたかな匂い。期待に胸がふくらむ。

ほんの数日前に見つけたばかりのパン屋さん・フリアン光井^{みつゐ}は、六時に開店、お昼には閉まってしまふ（売り切れしだい終了とも！）という朝型のお店だった。工場^{こうば}と直結した質素な店がまえで、この上なく穴場的な雰囲気はただよっている。パンの陳列台には商品名の書かれたポップはなく、まして値段すらわからないという商売のけなさ。

今日はいつもより早起きして、脇目もふらずこのお店に直行した

私なのでした。早歩きで軽く一時間、記念すべき初来店。メロンパ
ンとサンドイッチをゲットして、いい一日のスタートをきることが
できたぞ、と。

「今日もいいことありそう。ふふー。どこで朝ごはんにしよう」

小高い丘の公園か、内海近くの遊歩道。稲刈りのすんだ田んぼの
畦道でもいい。あ、こないだ発見した古墳の広場なんかも……いや
いや、やっぱり人様のお墓でごはんは躊躇すべきなのでは？

そんなことを考えながら歩きだした私の耳に、またカラリンカラ
ンと聞こえてきた。

「本日のお客さん第一号の記念に。これどうぞー」

季節はずれなぐらいに陽気な声。振り向くと、これまた真夏を思
わせるコンガリ顔に、びっくりするほど明るい金髪。白いユニフォ
ームから窺うに、ぷちヤンキーなパン職人。そんなお兄さんが、私
を呼び止めたのだった。

「あっ、ありがとうございます」

パックのイチゴミルクを受け取りながら、お礼を言う声がわずか
にうわずっていた。

そして、私はさらに戸惑ってしまった。ジュースを渡したら店に
戻ってゆくものと思いきや、お日様みたいなお兄さんは、ニコニコ
して私を見おろしたままなのだ。

とりあえず、微笑みを返してみる。ニコ。お兄さん、ニコニコニ
コ。うわー埒があかないとはこのことだ。しかもこの雰囲気、どこ
かで見たことがある……。

「あのう、では、私、行きますので」

おずおずと言ってみる。お兄さんは笑顔のまままだ。仕方がないの
で踵を返す。すると。

「草野風砂ちゃんでしょ。話は、兄にいちゃんから聞いてます」

ガシッと手首をつかまれ、ギョッと首を回してお兄さんを見上
げる私。

「あは……ははは」

ひきつり笑いをする私に、お兄さんは光明を司るアポロンの
ごとき神様のオーラをまとして、言い放った。

「オトナにはコドモを学校に行かす義務がありますんで。さ、配
達ついでに送らしてもらいます」

職員室へ配達された私は、完璧な笑顔のおおがみ大上先生の席の前で、硬
直して立っていた。ここは学校なのに、私服姿なのがよけいに居心
地が悪くて悪くて。悪事を働いてましたってことがほかの先生たち
にも丸わかりで、ただただ冷たい汗が背中を流れていた。

「胸を張っていられないぐらいなら、規則に背くなんてこと、しな
いほうが賢明だよ」

ゆったりとした口調は、厳しいことを言っても穏やかだ。ま
だ若いのに、誰よりも威厳をたたえて職員室に君臨している。私の
担任だ。

「早寝早起きで健康そのもの、学校以外のことでは超がつくほど積
極的。ぼくは好きですよ、でもね、きみは中学生なんだから。しか
も受験生ときた。草野さんは進学希望だったよね」

「はい。……一応」

進学と言ったって、ほかに選択肢がないんだもの。母親が自分の
母校を勧めるわけで。勉強しなきゃ無理だけど、就職なんてもっと
無理。

「観念しなさい。このさき生きてゆくのに、今のままでは破綻が目
に見える。生半可な意識では、人と違う道は進めないよ」

先生の言うことは……きっと真実で、私だって、わかってはいる。
先生が頭ごなしに怒ったりしないのも、親の離婚（原因は父親のD
V、らしい）で、こんな時期に急に転校してきた私への配慮だって
わかってる。

でも、わかっている、だめなんだもの。

涙がこぼれそうになって、私は慌ててうつむいた。大上先生が生
徒を泣かしてる、なんて、ほかの先生たちに思われたくない。お腹

にぐっと力を入れて、奥歯を噛み締める。そして、息を少しずつ吐く。

私は、顔を上げた。うん、まばたきで涙を引っ込ませることに成功。

「朝礼がそろそろはじまるよ。先に教室へ行くかい？　それとも、今日は帰るかい」

先生は机で日誌とプリントをトントンと揃えながら、顔はこちらに向けて訊いてきた。私が黙っていると、おもむろにワイシャツの胸ポケットから携帯を取り出し、どこかへ電話をかけた。

「うん、そう……頼むわ」

親しげな様子だなと観察していると、先生は携帯を折りたたみながら立ち上がった。

首が痛くなるほどに、背が高い。

「明日、待ってるからね草野さん」

パンの匂いがしみついたシートに頭をあずけてエンジンの震動に身を任せていると、朝食をとりそこねたままだということに気がついた。

早速お腹が鳴る。となりから弾けるような笑い声が届く。車がちょつと跳ねた気がする。

「ええよ、ここで食べて」

ありがたい勧めに、ガサゴソとビニール袋のなかをさぐる。大好きなメロンパンが、無残な形で現れた。

「あー、それ焼きたてやったもんな。そんなにへちゃげちゃって。

また今度くわしたるよ。学校のない日に」

ユニフォームを着ていないとそうは見えないパン職人が、私の二度目のガツクリ顔を横目で見て、カカカと笑い飛ばした。

私はふてくされて、ぬるくなったイチゴミルクをストローで吸った。メロンパンを口に運ぶ。舌は、なんの味も感じ取らない。私はいつのまにか泣いていた。

やや急ブレーキで、体がカクンと前に揺れる。交差点のまんなか上空で、黄色と赤の交代。ゼブラゾーンに食い込んで停まった私たちに、非難がましい視線が突き刺さる。

「……あー、……」

お兄さんは車を避けて横断してゆく会社員に申し訳なさそうに頭を下げてから、ハンドルにもたれかかるようにして唸った。

「泣くのか、食べるのか、どっちかにしたら」

「どっちか選んでる余裕なんて、ないんだもの」

「そういうもんかあ？」

お兄さんは腑に落ちない様子で、でもそれ以上は何も言わずに信号待ちをしている。

私はメロンパン最後の一口を頬張ると、甘ったるいピンク色の液体で飲み下した。ものすごく、食べ物を買流した気分……。さすがにサンドイッチまでには手がでない。

信号が青に変わる。無言が走ってゆく。ここからなら家まで十分とかからないだろう。たいして面識もなかった祖父母のところに間借りしているのもあって、帰りたくない気持ちちがスピードメーターを振り切る勢いで押し寄せてくる。

まだとめどなく流れる涙のあいまに、となりのお兄さんを見た。朝日を受けて、前髪がきらきら光の粒を宿している。横顔は先生に似ていなくもない。眩しさのためか、少しすがめて前を見つめる目はお兄さん独特のものだ。先生とは兄弟でも、やっぱり違う。

「ちよっと、先に配達先に寄ってええかな」

お兄さんがハンドルを切った。曲がった先にすぐ小学校が見えた。「ここすんだら風砂ちゃんどこ行くし」

給食棟の裏に車をつけて、かろやかに運転席から降りたお兄さんは、テキパキと薄黄色のコンテナを何回かに分けて運んでいった。おそらくこのあたりの学校の給食パンは、フリアン光井のパンなのだ。座席のすぐうしろ、カーキ色のカーテンをめくって荷台を覗くと、店名の入ったコンテナはまだまだ積んである。

学校にまともに通っていないことを、私ははじめて後悔した。

「お待たせ。あー泣きやんだな、よかった」

前髪をかきあげながら乗り込んできたお兄さんに、私は思わず頼んでいた。

「配達のお手伝い、させてください」

このまま家に帰るより、ずっと……ずっと、有意義だと思ったから。けして、単に帰りたくないというわけじゃない。うん。

「ああ。それは、ありがたい申し出」

お兄さんはニコツとしたものの、目の表情からして断る気配が濃厚だった。キーを回してアクセルを踏むと案の定、

「うちに就職してくれた暁には頼みます」

やんわり、拒絶した。わかっていたけど、かなり、悔しい。

「そりゃ、邪魔になるだけかもしれないけど」

私がぼやくと、

「それもそうなんやけどね、未成年、しかも学校サボッてる子をオトナが連れ回してたらマズイんです。俺もハタチになってしまったし、兄ちゃんも迷惑こうむります」

思いもかけない言葉が返ってきて、絶句した。考えなしのことを言った自分が恥ずかしい。ただでさえ、不登校で迷惑をかけているのだった。お兄さんには配達ของさなかに送ってもらうわけで、先生は私という生徒がいるせいで、肩身が狭いかもしれないわけで。確実に手間が増えているわけで。

今すぐ車を降りて、穴を掘って入ってしまいたかった。

「ま、自覚したんなら必要以上に落ち込まんでええよ。まったく誰の迷惑にもならん生き方なんて、誰にもできんのやし……」

お兄さんはほんの少し翳りのある笑顔で、私をちらりと見た。

「でも、どうしてもって言うなら連れてっただけてもええよ」

「う、あ。いいです、やっぱり」

しどろもどろになりつつも、甘い、罠つきの誘惑の言葉に飛びつきそうになるのを抑えて遠慮した。

お兄さんはぶっと吹き出して、ハンドルに顔を埋めて笑った。横断歩道の通行人に、また冷たい視線をもらっていた。

☆

いとお下がりだという制服は、ぴったりではないけれど着るのに問題はないシロモノで、いやがおうにも私を学校へ追い立てた。ふだん散歩のお供になっているシヨルダーバッグには、今日は教科書やペンケースが落ち着かなげに詰まっている。足取りより重い荷物に辟易しながら、目指すは学校だ。早歩きなんて到底できそうもない。

でも、先生と約束したから。先生が待ってるから。それに、昨日のお兄さんの言葉も効いていた。

やっとのことで校門にたどりつくと、登校してきた生徒たちに声をかけているオトナの人がいた。

「よくきたね。待っていたよ」

大上先生は、私の頭にポンと手を置いた。

顔が赤くなるのがわかる。挨拶どころじゃなかった。うつむいて、震える声で尋ねてみる。

「毎日、こんなことしてるんですか……？」

「今日は草野さんを待っていたから。いつもは校長先生がいるよ。一日だけ代わってもらったんです」

私は今にも泣きだしそうだった。自分のためにここにいてくれた先生が、好きで、好きでたまらなくなった。

「きっと、先生がいなかったら、また、サボッてたと思う」
しゃくりあげそうになるのを我慢して、先生を見上げる。

「それはそれは。光栄です」

満足そうな、私のすべてを包み込むような穏やかな微笑。オトナの余裕、というやつなのかな。私にはない、地にしっかりと足がついていて、この世に存在することの不安を乗り越えた……覚悟の証。

私は不安なのだ。以前はそうでもなかったのに。「生きていること」なんて、考えることなく生きていられたのに。原因はやっぱり親の離婚なのだろうか。住み慣れた町を離れたせいだろうか。やけにかまってくる、見知らぬ祖父母に甘えられないからだろうか。

私は、私がどう生きたら、私がこの世の中でどんな存在であればいいのか、わからなくなっていたのだ……。

「先生」

校舎へ向かう前に、訊いておきたいことがあった。

「先生は、私に答えをくれる？」

とつぜんの問いに先生は目を丸くしていたけど、ややあってから、もういちど私の頭にポンと手を置いた。

「草野さんが求めている答えは、ぼくがかわりに導きだすことはできない。でも、手助けすることは、できるかもしれない」

その返事は、私に勇気をくれたように思う。

転入の挨拶をして以来の久しぶりの教室は、受験モードにどっぷりと浸かっているせいか、ふらりとやってきた私に興味本位で話しかけてくる子はいなかった。どうせ卒業まで半年もないのだ、わざわざケアリの子と親しくする必要はないとも言いたげな空気の中、私は用意されていた窓際いちばんうしろの席にバッグをおろした。視線を感じたけど、顔を上げたときにはもうなくなっていたから、とくに私からアクションを起こすことなく椅子に座って窓の外を眺めることにした。

高い空を雲がたなびき、私の意識をまだ見ぬ地へいざなおうとする。でも、制服に支配された体はここを動けない。せめて、休み時間に校内を散歩して気を紛らわそう……そんなことを考えているうちに、予鈴が鳴った。

大上先生が教壇に立つ。日直の号令に合わせてみんなが起立・礼をする、先生は挨拶を返しながら教室の端から端まで視線をやった。最後のあたりで私と目が合い、少しだけ顎を引いて、目を細め

た。

私は、パン職人のお兄さんの目元を思い出していた。昨日は家に送ってもらったあと、お礼もそこそこに別れてしまったから、どうにも申し訳ない気持ちが残っている。それに私が泣いたことを口止めするのを忘れていたから、先生が知ったんじゃないかと気が気じゃなかった。

朝のホームルームを終え、別の教室へ向かう先生の後ろ姿を目で追う。私のクラスは、今日は数学の授業がないみたいだから残念。

一限目は英語だった。前の中学とは教科書が違っているし、もちろん授業の進み方も違うしで、英語は得意なのにもものすごく疲れた。二限目を受ける気力など起こるはずもなく、頭痛もしてきたので保健室に避難することにする。となりの席の子に手短にワケを話すと、これまた端的に道筋を教えてくれた。

保健室のある校舎の向こう側に、給食棟らしき建物が見えた。銀色の低い煙突から、湯気が薄く立ちのぼっている。

野菜を煮込む匂いにつられて、私は教えられたルートを外れた。

そして、フリアン光井の配達車を見つけた。昨日はやっぱり、私のせいで配達ルートを変更したんだろう。本来の配達時間はこの時間なのだ。

そっと距離を詰め、車の前のほうに心もち隠れるようにして作業が終わるのを待った。ほどなくして運転席に戻ってきたお兄さんが私を見つけた。開けた窓から身を乗りだして、手を振ってくれた。

「ちゃんと学校きたんだ。けど、こんなどこにいるのはナニゆえ？」

「保健室に行くところ……。あの、昨日は本当にありがとうございました」

私は大急ぎで頭をさげた。お兄さんは仕事の最中だ。つい待ち伏せみたいなことをしてしまったけど、これでは昨日と同じでロクにお礼もできそうにない。

だいたい今、何も持っていない。会えるとかわかっていたら、唯一自慢できるチーズケーキを焼いてくるんだったのに。情けなくなっ

て、目頭が熱くなってきた。ああ、なんだか頬まであったかくなってきた……。

「ちょ、熱あるんじゃないの風砂ちゃん」

いつのまにか車を降りて前に立っていたお兄さんが、私のおでこにてのひらをあてた。その手は私の頭なんて軽くつかんでしまいそうなくらい大きくて、よくこねたパン生地みたいにしっとりしていて、ひどく心地がいい。

「久しぶりに勉強したもんやから、知恵熱なんじゃないの」

「そ……んな、コドモじゃないし。だいたい知恵熱ってそういうものではないし」

またたくまにボウツとしてゆく頭で反論すると、お兄さんが少し怒ったように笑った。

「コドモやってば。素直にみとめて、ちゃちゃつと保健室。ほれ」とつぜん視界が変わって、きいと耳鳴りがした。お兄さんが私を軽々と抱き上げている。お姫さま抱っこというやつだ。堅い鎖骨が、じんわりと汗をかきはじめたこめかみにあたる。意外とドキドキしないのは、私が熱に浮かされているせいだろうか。

ただ、お兄さんの服ごしの体温が私にしみこんできて、安堵感でいっぱいになった。

うつすらと目を開けると、淡い木目の天井が見えた。女の人の声と、男の人の話し声がやわらかなカーテン越しに聞こえてくる。ここが保健室だということを思い出して、今は何時なのだろう、と白い壁に時計を探す。

「あら、目が覚めましたね」

シャツとアルミがこすれる音がして、保健のおばあちゃん先生が柔和な顔を覗かせた。私は慌てて髪をなでつける。

「どう、具合は」

おばあちゃん先生と入れ替わりに顔を見せた大上先生が、ベッドのそばのパイプ椅子に腰を降ろした。私に向けられた心配のまなざ

しがあまりにもまっすぐで、なんだかおもはゆい。

「ただの、知恵熱です。もう大丈夫」

まだ少し頭痛がするけど、熱っぽさはすっかり体から抜けている。

「今、何時ですか」

「二時を過ぎた頃だよ。何度か様子を見にきたんだが、よく寝ていたね」

寝顔を見られていたという恥ずかしさと（きつと間拔けな顔をしてた）、給食を食べ損ねた無念さで、私はがっくりとうなだれた。色気も食い気もそれなりにある年頃なのだ。先生は寝てる私を見て笑っただろうし（微笑ましく思ってくれたのだと思いたい）、何より、給食のパン。フリアン光井のパンをかなり楽しみにしていたのだ。昨日、家でお昼に食べたサンドイッチがそれはもう絶品だったんだもの……。

「授業はあと体育だけだから、今日はもうここで過ごしていなさい」先生は長い足を組み、腕を組んだ。手首の時計が高価そうな光を放っている。それを見て、ああ先生は恋人がいるんだと悟った。何年前のクリスマスに、お母さんがお父さんに贈ったのと同じ時計だったから。

「……ねえ、先生」

上掛けのシーツを胸元にたぐりよせるようにして握って、私は顔を上げた。

「たしかに好き同士だったはずなのに、どうして、仲が悪くなってしまったのかなあ？」

お父さんがお母さんに暴力をふるっていたなんて、ひとつも気がつかなかった。私は何も知らずに、前の中学に毎日のほほんと通っていた。受験生だったのに、放課後は暗くなるまで放浪していた……ああ、でも、私の放浪癖はそんなに昔からのものじゃない。せいぜい、三年生になった春頃から。

来週から新学年というときに、持つところが破れてしまった学生カバンのかわりにシヨルダーバッグを買ってくれたのはお父さんだ。

その買い物するとき、お母さんは一緒にいたのだろうか。春休み最後の日、私にごちそうを作ってくれたお母さん。食卓に、お父さんの姿はあったのだろうか。

プレゼントの腕時計を、ゴミ袋の中に見つけたのは、いつのことだっただろう……。

「私、ほんとはどこかで気づいていたのかな。現実から目をそらすために放浪してたのかな。……逃げてたのかな」

私は淡々と語っていた。涙ぐみもせずに。泣くにはまだ、しゃべっていることが私の中で、私のものになっていなかったのだ。

じっと黙って聞いていた先生が、組んでいた足を元に戻しながら静かに息を吐いた。

「それは、逃げなんかじゃないよ。草野さんに必要なことだったんだ」

先生は椅子から腰を浮かすと、体を屈めて、私の頭をなでてくれた。その瞬間、私の目から涙があふれはじめた。

「自分の気持ちを自覚していなかっただけ。だから周りに相談しようなんて気にもならないし、でもどこか落ち着かなくて、草野さんは新しい景色を見ることで知らず知らず癒されていた。もともと、そういうことが好きだったのかもしれない。こっちへ引っ越してきて、拍車がかかったんだろうね」

先生が、泣いている私のかわりに言葉にしてくれた。

「もし君が望むなら、ぼくは相談相手になれる。先生としてできるかぎりの手助けはする」

「あり……がとう、ございます」

ぴんとアイロンがかけられたハンカチを受け取りながら、私は先生の真摯な表情を見つめ返した。素敵な先生にめぐり会えた。初対面のときにすでに感じていた好意が間違いではなかったことに、私は心底、嬉しかった。

先生を保健室から見送って、もういちどベッドにもぐり込む。シートにしみた涙の余韻にひとりながら、先生の頼もしさを想った。

それこそがオトナだということなのだろう。私の倍ほど近く、この世界に生きてきた人。きっと私よりたくさん経験の積み重ねてきた人。私なんて、先生にとってはコドモでしかない、よね……。

「ちよつといいかしら、草野さん？」

しんみりしていたところへ、保健の先生がカーテン越しに声をかけてきた。ああ、ここにもっと年輪を重ねた人がいた。私なんてコドモを通り越して孫なぐらいの、おばあちゃん先生。

「大上先生のことなんですけどね」

そう言いながら入ってきた保健の先生は、おどろくほど私のお母さんに似ていた……表情、が。なんだろう、少し困ったような、でも笑っている、何か言いたいのだけと言いだせない。たぶん、お腹の底で気持ちを抑えた……そんな、苦しげで、やさしい表情。

「頼ってあげてね。みつ……大上先生は人から必要とされることではじめて、生きる人間だから。わたしがこんなこと言ってたって、本人には内証よ」

おばあちゃん先生は、シートから顔だけ出した私の胸元をポンポンとたたいて、

「ここには、いつきてもいいからね。いつもよりがんばって、熱が出てしまったときにも。何か、話したいことがあるときにも」

そこでようやく、にっこりと笑った。

私もつられて、いい笑顔になっていたと思う。

ここの学校は放課後に音楽が流れるらしい。クラシックのジュピターを聞きながら、ショルバグを取りに教室へ戻ると、保健室への行き方を教えてくれた子が一人きりで残っていた。はなうたに興じていた彼女は私を見ると、椅子から立ち上がり、ちよつと首を傾げて微笑む。

「熱、もう大丈夫？」

私のことを、待っていてくれたんだ。

☆

きのうの夜にヒマワリ型で焼いたチーズケーキを抱えて、いくらかホッとしたような顔のお母さんに見送られて家を出る。

土曜日の朝。学校をさぼっているわけではないので、なんとなく晴れがましい気分ですバス停に向かう。調べておいた時刻より先に、バスの姿が見えたから早歩きになる。

座席に落ち着いてから、風にほどけてしまった細いリボンを髪に結びなおした。めったに着ないワンピース。ふわふわしたフェイクファーのバッグ。なぜだろう、今日の私は気合いが入っている。

バスに揺られているあいだずっと保冷剤に冷やされていた足が、砂利道に降り立つやいなや、ぶるりと震えた。緊張しているのかもしれない。

目的のお店にシャッターが閉まっているのを見て、私は座り込みそうになった。

「土日祝日、定休日なんじゃない……」

たしか、お兄さんは言ったはずだ。学校のない日にメロンパンを食べさせてくれると。あれは嘘だったのか？

すぐには立ち去る気にもなれなくて、つまさきで砂利を蹴りつつ佇んでいると、ジャジャジャツと派手な音を立てて大きなバイクが私の前で急停車した。フルフェイスのヘルメットの下から現れたのは、真夏の太陽を思わせる金色の髪。

「こんなところにいるのは、ナニゆえ？」

普通にびっくりした様子で、お兄さんがバイクを降りる。私はなんだか悔しくなって、ケーキの箱を押しつけるとスカートの裾をひるがえして駆け出そうとした。

「ちょ、待ち。風砂ちゃん」

つかまれた手首が、痛いような、熱いような。……切ない、な。

「兄ちゃんなら、家、ここじゃないよ。渡しとけって言うなら、ちゃんと配達しとくけど」

「配達はしなくていいです」

顔を背けたまま、ぶっきらぼうに答える。

見えないけれど、お兄さんが目をすがめて笑ったような気がした。私が振り返るより先に、目の前にお兄さんの顔が出現する。

「これは、こないだのお礼かな。家に送っていったのと、保健室に送っていったのと」

「……そうです」

「そっかー、ありがとう」

お兄さんは、思いのほか素直に喜んでくれた。箱の中をちらっと覗きこんで、チーズケーキが世界でいちばん好きだとのたまった。そして。

「風砂ちゃん、今日ヒマか」

唐突な質問だったので、私は思わず頷いていた。実際ヒマなんだけど。

お兄さんはニカツと笑い、片手でお店のシャッターを持ち上げた。カラリンカラン、とドアベルを鳴らせて、私に中へ入るよう促す。

「時間かかるけどさ、焼きたて食わしたる」

こんなこともあろうかと生地の準備はしていたんだ、と。

私はゲンキンなもので、

「わーい、焼きたてメロンパン！」

と、はしゃいだ。するとお兄さんが、

「そんなん、ウチでは作ってないけど」

などと言う。じゃあ私が買ったのはなんだったの、と悩んでいると、

「あー、あれだ。このへんではメロンパンでなくて、サンライズって言うんだ。風砂ちゃん引っ越してきたんだもんな、知らないよな」

「サンライズって……日の出。朝の、太陽？」

「さー。由来はよくわかんねえけど、そんなふうに見えないこともないだろ」

お兄さんはケーキの箱をお店の冷蔵ケースにそっと置いて、店の

奥、ガラスで隔たれた工場に入っていた。私服姿で生地をこねているのが、ものすごく貴重なパンを焼くように思えて胸が高鳴る。サンライズ。私の向日葵ケーキと、ちょっと相性よくないですか？私の放浪癖はめでたく封印され、足しげくこのお店に通うことになる。

夜は明けた。暗さで見失っていた道を見つけたから、もう迷わない。

＊おわり＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5931y/>

メロンパンの太陽がのぼるとき

2011年11月18日04時31分発行